
アカシアの本棚

アバター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アカシアの本棚

【Nコード】

N8458E

【作者名】

アバター

【あらすじ】

町一番の大型書店の、あるベンチ。アカシアと名乗る悲運の少女と、彼女の願いを叶えてあげようとする、協調性の無い4人の人。その一人、日常に飽きた主人公が織りなす、ほのぼのとした青春小説です。

序章、あるいは終章。

何をするわけでも無く、ただ平凡な毎日を送れば、いずれは大人になれると思っていた。

日常はありきたりで、物足りない溜め息が漏れる。それは恐らく、ある種の贅沢なのだろう。懸命に育ててくれた両親に対して、十六年間関わり続けた世界に対して、振りかざしてはいけない、俺自身のエゴイズムのような気がする。

だから、今日も変わらない日常に、変わりえない自分で溶け込む。群れを成して、個性を濁らせている。

そんな十六年間で、俺は、とある口癖を身につけていた。自慢できるものでもないし、どちらかと言うと、低俗の部類に入るだろうと思う。

『なるようになる』

俺が、未だ短い人生で得た、たった一つの理だ。世界は、日常は、すべからずこの一言に当てはまる。

だが、……………いや、だからこそ、俺はみんなと関わろうとしたんだ。

「準備は良いか？小僧。」

「大丈夫ですか？先輩。」

前方を歩く、コートを着た白髪と、髪の毛長い、セーターを着た少女が、そう言っただ俺の歩みを促す。

「おい、怖じ気づいたのか。ケヤキ？」

後ろから、背中を押してそう投げかける、パーカーを着た女。俺の顔を覗き込み、口の端をつり上げて、続けた。

「なるようになる、だろ？」

微かに笑うその顔を見て、知らないうちに、自分自身も笑っていることに、しばらくして気付いた。

先を歩く三人の背中を見ながら、一度深く深呼吸をして、足の震えを無理矢理黙らせる。

「……………じゃ、行くか。」

清水 櫻。十六歳。高二。

たった今から、大罪を犯す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8458e/>

アカシアの本棚

2010年10月10日01時51分発行